

# 羅生門

芥川龍之介

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剥げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

なぜかというところ、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中の寂れ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸がすむ。盗人がすむ。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何

羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなるときには、それがごまをまいたように、はっきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついばみに来るのである。——もっとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れめに長い草の生えた石段の上に、からすのくそが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようというあてはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた。今この下人が、長年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」というよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた。」というほうが、適当である。そのうえ、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人のSentimentalismに影響した。申の刻下がりから降りだした雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、ぎあつという音を集めてくる。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した葺の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

1 【羅生門】平安京の正門。朱雀大路の南端にあった二階造りの大きな門。本来は「羅城門」と表記。  
2 【丹】朱色の塗料。  
3 【きりぎりす】コオロギ。  
3 【朱雀大路】平安京の中央を南北に貫く大通り。  
4 【市女笠】菅や竹で編んだ女性用の笠。  
4 【揉鳥帽子】男性が平常服の際に用いたかぶり物。  
6 【辻風】つむじ風。  
7 【旧記】古い記録。  
10 【狐狸】キツネやタヌキ。

1 【鴟尾】宮殿・仏殿などの棟の両端に取り付けた飾り。  
6 【襖】脇のあいた裏地のついた衣服。庶民のふだん着。  
10 【暇を出す】使用人をやめさせる。  
14 【Sentimentalism】（フランス語）感傷的な気分。  
14 【申の刻下がり】午後四時過ぎ。  
20 【葺】瓦ぶきの屋根。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいいとまはない。選んていれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように捨てられてしまうばかりである。選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道を低徊したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」の片をつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということ、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きくきめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱に止まっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂えない、人目にかかるおそれのない、一晚楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思っただからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰に下げた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、わら草履を履いた足を、そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息をこらしながら、上の様子をうかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみをもったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくっていた。そ

れが、はしごを二、三段上ってみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそここのこと、動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々にくもの巢をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、やもりのように足音をぬすんで、やっと急なはしごを、いちばん上の段まではうようようにして上りつめた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、むぞうきに捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男も交じっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともし

1 【いとま】暇。  
2 【築土】屋根をつけた塀。  
4 【低徊】あれこれと考ながら、ゆっくり歩き回ること。  
4 【逢着】ある事実や問題にぶつかること。  
8 【くさめ】くしゃみ。  
8 【大儀】気が重くて、やりたくない。  
9 【火桶】丸型の木製の火鉢。  
11 【山吹】山吹色。黄色の一種。  
11 【汗衫】汗取り用の下着。  
15 【聖柄の太刀】飾りのない、木のままの太刀。  
15 【鞘走らないように】鞘から刀身が抜け出してしまわないように。

5 【やもり】ヤモリ科の爬虫類の総称。壁などをはう。  
19 【檜皮色】ヒノキの樹皮のような赤黒い色。

した松の木ぎれを持って、その死骸の一つの顔をのぞきこむように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木ぎれを、床板の間にさして、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手にしたがって抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのにしたがって、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。——いや、この老婆に対するといつては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、おそらく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床にさした松の木ぎれのように、勢いよく燃え上がりだしていたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけで既に許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さっきまで、自分が、盗人になる気であったことなどは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖

柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み寄った。老婆が驚いたのはいうまでもない。

老婆は、ひとめ下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人を突きつけていこうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、初めから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわな震わせて、肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗く黙っている。これを見ると、下人は初めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということ意識した。そうしてこの意識は、今まで険しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。あとに残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声を和らげてこう言った。

「おれは検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからおまえに縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのか、それをおれに話しさえすればいいのだ。」

3 【暫時】しばらくの間。

4 【頭身の毛も太る】恐ろしさに体中の毛が逆立つ感じをいう。『今昔物語集』にこの種の表現がみられる。

2 【弩】石をはじき飛ばす大型の武器。

12 【執拗く】しぶとく。じつと。

18 【検非違使の庁】平安時代、都の犯罪の取り締まりと裁判をつかさどった役所。

すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目で見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、なにか物でもかんでいるように、動かした。細い喉で、どがった喉の動いているのが見える。そのとき、その喉から、からの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思つたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一緒に、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干し魚だと言つて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんなら、今でも売りに往んでいたことである。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言つて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つていたそうな。わしは、この女のしたことが悪いとは思つていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃやて、しかたがなくなつたことである。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃやて、しかたがなくなつることじゃわいの。じゃやて、そのしかたがないことを、よく知つていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみをもつた大きなきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさっきこの門の上へ上がつて、この老婆を捕らえたときの勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかつたばかりではない。そのときの、この男の心持ちからいえば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、おれが引剥をしようと思つていぬ。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」  
下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎ取つた。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎ取つた檜皮色の着物を脇に抱えて、またたくまに急なはしごを夜の底へ駆け下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それからまもなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光を頼りに、はしごの口まで、はつて行つた。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

6 【かつらにしよう】かつらにしよう。

9 【墓】ひきがえる。

13 【四寸】一寸は約三センチメートル。

13 【太刀帯の陣】帯刀して皇太子や御所の警備にあつた役人の詰め所。

14 【往んだ】行つた。

14 【疫病】流行病。

15 【菜料】おかず。

13 【引剥】追い剥ぎ。

20 【黒洞々たる】底の知れない深い洞穴のような暗さ。

下人の行方は、誰も知らない。

〈出典 『芥川龍之介全集 第一卷』(岩波書店、一九七七年)〉

【著者】芥川龍之介(あくたがわりゆうのすけ)

一八九二(明治三五年)年―一九二七(昭和二)年

作家。東京都の生まれ。

【著書】『ドロミック』『蜘蛛の糸』『蜜柑』など